

21年産

今までと違った視点で田んぼを観察しよう

田んぼの生き物が米を語る

米の品質の低下は農薬・化学肥料で効率化を求めた結果か

生産者通信

NPO法人
米ニケーションセンター
定価 100円(送料込)

県内各地で「ユキワリソウ」の展示会が開催され、我が家の庭続きの雑木林の斜面でもオウレンの白い花が一面に咲き、カンアオイやヤブ椿の花が開いて春の息吹が感じられるようになりました。気象庁から暖冬だったことが発表されましたし、桜の開花も早まりそうです。

雪国でありながら雪の苦労も無くて春を迎えられることは嬉しくもあり、反面なんとなく物足りなさを感じています。人間はなんと我がままです。

それに比べて日本の政界はなんともお寒い状態です。政府与党が国民の期待に応えられずに右往左往して内閣の支持率が10%台に落ち込んでいるところに、世論調査では次期総理候補に目されていた野党第一党の党首の公設秘書が、こともあろうに逮捕されてしまうという思わぬ事態がおきてしまいました。総理の専権事項である国会の解散・総選挙が何時おこなわれるか

予測もできませんが、残念ながら政治に対する不信感が一層広がってしまったのは確かです。しかし、こんな時こそ選挙の際には、それぞれ政党の政策と候補者の資質をしっかり見極めて貴重な一票を行使すべきでしょう。政治の墮落の原因は、私たち国民にもあるのですから。

民間稲作研究所認証センターによる「認定講習会」が2月15日にウエルサンピア新潟で開催されましたが、前日14日午後から新潟県有機稲作ねつとわあく主催で農と自然の研究所・代表理事、宇根豊氏の講演会があり、前泊で参加しました。

宇根さんの講演をお聞きするのは3回目になりますし、以前に購入していた宇根さんの著書「天地有情の農学」にも目を通していたのですが、世上で「宇根哲学」と言われているように何回お聞きしても自然環境や生き物に対する宇根さんの目線と心情の奥深さに感動させられてしまいます。

宿泊で、たまたま宇根さんと同室が割り当てられました。講演会が終わって部屋に帰られた宇根さんの第一声が「トンボの写真を展示された内山さんですよ」というものでした。長津代

表から「出品販売や展示するもの、何でも良いから持参するように」といわれ、昨年の6月の我が家の有機水田のトンボの羽化写真を会場に掲示してあったのです。「一株にあんなに多くのヤゴが登って羽化するはずがない。他から持ってきたやつけたのではないかと思つた」とのことでした。宇根さんのこれまでの調査では10a当り6千羽が最高だったそうです。我が家の有機水田では少なくともその数倍のトンボが羽化していることになりました。「ヤラセではない」ことをご理解いただき、その後はトンボからイトミミズによる抑草の話まで貴重な意見交換をさせていただきました。

また、私はパナソニックのDMCL1というマニュアルなデジタル一眼レフを使っていますが、「レンズはライカですね。接写レンズも買つてどんどん記録して下さい。」と、接写レンズを買つか否かを迷っていた私の心を見透かされてしまいました。

当日は、写真の他に我が家の有機栽培コシヒカリと「自然農法」(不耕起・無施肥・無農薬で栽培したもの)をそれぞれカルトン(米検査で使用する見取り皿)で展示



しました。「自然農法」の米は私自身も関わっている某体験農場のものをお借りしたのですが、米を見ることを職業にしてきた私自身でさえ過去に覚えがないほど粒の大きき、厚み、揃いが良く、乳白等の未熟も見当たらず、グレーダーにかけていないにも関わらず、クズもほとんどないというものでした。収量は3aで1俵程度でしたからお世辞にも多いと言っわけにはありませんが、品質の良さには注目すべきものがあります。

かつては米の等級は5等級制でしたが当時は整粒80%以上の2等米が立派に存在していました。現在の1等は整粒歩合だけで見れば5等級時代の3等、整粒歩合が70%以上であれば良いことになりました。ところが、残念ながら近年では整



粒80%はおるか70%台ぎりぎりのものがほとんどであるといつても過言ではありません。1等と2等の境目のものが多くて検査も難しいということですが、一見整粒のように見えるのですが、良く見ると粒が變形していたり、捻じれていたり、厚みがなかったり、基部や背部が粉状化するなど、いわゆる「その他未熟」の混入が多くて2等に格下げされてしまうものもあるのです。登熟の途中で何らかの障害にあつてしまったのが原因でしょうが、これは克服されれば、品質が向上し、千粒重も増して増収にも結びつくのでしょう。「自然農法」の米にはそうした現象がまったく見られないのですから、原因究明のカギが隠されているかもしれないと期待しているところです。(内山常蔵記)

連載 1 まさ爺の初心者講座

http://www.bm-sola.com

始めてみよう! B M W 技術



謙信の郷 峯村 正文

B M W 技術との出会い

はじめて B M W 技術と出会ったのは 1995 年 2 月でした。

山形県高畠町の「農事組合法人 米沢郷牧場」の代表、故伊藤幸吉氏からの紹介でした。「面白いから見に来ないか」と言う誘いに躊躇せず足を運びました。驚いたのは舎の脇にある

「B M W プラント」から酱油色した水を取り出して「これは牛の尿を B M W 技術で精製したもんだ」と言いながらゴクゴク飲んで見せた光景でした。

度肝を抜かれ「なんだこりや!」と驚愕したのがつい昨日のことのようです。臭いのない畜舎にも驚き、この液体「生物活性水」を利用して「自給飼料」を生産していることにも驚きました。それから私と B M W 技術との交流がスタートしました。

B M W 技術とは

まず、B とはバクテリアのことで、M はミネラル、W はウォーター(水)のことです。

良質な土壌の中に働いているバクテリアとミネラル

水のシステムに着目して、B M W システムを活かす工夫から創り出された一連の技術です。

自然の浄化力の根源であるバクテリア(微生物)とミネラル(鉱物)、そしてウォーター(水)のシステムを、家畜糞尿や食品工業排水、生ゴミなどの処理に活かす技術で、頭文字をとって B M W 技術と呼ばれます。

特徴的なことは E M 菌・E M 技術のように特別な菌(私は特別な菌とは思わないが)とか資材とかを言わないで、その地域にある自然の岩石と良質な腐葉土を基本となる資材としている点でしょう。装置も手作りですし、極めてシンプルです。B M W 技術を口で説明す



ることはなかなか難しいのですが、里山の木の葉はゴミとなって堆積することはありません。自然生態系の中で分解されて土になるのです。では、この技術と水、鉱物の関係をもっと詳しく次回から説明したいと思えます。B M W はシンプルにして奥深い技術なのです。

謙信の郷(新潟県上越市)

1998年、上越市頸北地域の10戸の米農家によって設立。「地元の産業のひとつである酪農を堆肥に生かし、環境に負担をかけない米作りを行おう」という思いのもと、農業や化学肥料にできるだけたよらない米作りを行っている。



日本の農業の再建が課題になっている。福田康夫前首相は昨年、「食糧自給率50%」という目標を打ち出した。過去、自給率を大きく引き上げたのは英国だ。1970年に46%だったのを約20年間で70%台にした。英国が1973年にEC(欧州共同体)に加盟した際、ECは農産物の価格を政策的に高く設定しており、英

国の農業生産が刺激された経緯がある。自給率100%を超えるフランスも、農家の農業所得の9割が政府支払いだ。ECからは補助金を付けて穀物が輸出された。欧州で農業保護が進んだ背景には、ECが各国からの拠出金を集め、農業分野に重点的に投資したことがある。今も、EUの予算の約半分は農業関連だ。ただ先進国の農産物の輸出補助金には途上国の批判が強く、WTOは「2013年までに撤廃」で合意している。

所得補償か価格維持か

2009年2月26日付朝日新聞より抜粋

農家の所得に占める政府支払いの割合

	政府支払い A	農業所得 B	所得に占める政府支払い A ÷ B
日	19万円	122万円	15.6%
米	5593ドル	21159ドル	26.4%
仏	29520ユーロ	32700ユーロ	90.2%

(日本、フランスは06年、米国は02~06年の平均値。各国の農業当局のデータから。日本は全農家の平均。)

種モミ 若干余裕あり!



コシヒカリ(従来)

ゆきの精

五百万石

ご用命はエコ・ライス新潟まで